

佐原一族と都市鎌倉・満願寺

渡邊 浩貴（神奈川県立歴史博物館）

はじめに

三浦氏庶流の佐原氏は、近年文献史学にて政治史における観点で研究が進展しています。ですが、氏寺である満願寺をはじめとした本拠地での造寺・造仏活動の様相についてはなお多くの検討課題を残していると言えましょう。その一方で、満願寺では考古学より伽藍の遺構や瓦などの遺物に関する成果、また美術史学より同寺に安置される仏像群の造像年代や制作者の仏師に関する成果が提出されています。かかる隣接諸学の成果を踏まえるなら、氏寺満願寺を中心に佐原氏が創り上げた文化的環境の実態が分かるのではないでしょうか。すなわち文化史の観点から佐原氏を捉えることで、政治史だけではない、佐原一族のより豊かな姿を明らかにできるものと考えます。

そこで本稿では、鎌倉前期における佐原一族の文化活動に着目し、彼ら一族が築き上げた政治的地位や、京都政界・都市鎌倉と交流するなかで形作った人的ネットワークを明らかにしながら、満願寺の造寺を含む文化事業へどのように結実していくのかを検討したいと思います。京都政界との強力な人脈が注目される三浦惣領家ではありますが、その一族の佐原氏の場合はいったいどうだったのでしょうか。

佐原氏による氏寺満願寺の形成過程

氏寺満願寺の創建年代は、近世地誌『三浦古尋録』に採録される寛文五年（1665）「満願寺縁起記」によると、源頼朝に従軍する佐原義連が西国へ赴くに際して一堂を寿永三年（1184）に建立し、帰郷の後に大伽藍を建立して満願寺と号したと述べられます。一般的に、合戦への参加を契機に鎌倉御家人の本拠地で仏堂が建立される事例は珍しくありません。奥州合戦に参戦する北条時政が文治五年（1189）に願成就院を建立し（『吾妻鏡』、実際は文治三年に建立）、同合戦に参加した足利義兼は、樺崎寺を建立しています（「鑿阿寺樺崎縁起并仏事次第」）。これらを勘案すると、先の由緒内容を近世縁起だからといって偽作と断定することはできません。佐原義連が、少なくとも寿永元年（1182）には「佐原」を名字と称していることから（『吾妻鏡』）、本貫地である同地にむしろ宗教施設をなに一つ置かなかったとは想定しづらく、小堂規模の施設があつたことは認めてよいでしょう。

さて、満願寺に安置される觀音菩薩立像・地蔵菩薩立像の二軀は、十三世紀初頭の慶派仏師によるもので、かつこれらの尊像構成が正治二年（1200）に北条時政が故頼朝一周忌に願成就院北隣に仏堂を建立した際のものとほぼ一致しているため（『吾妻鏡』）、同時期頃の制作とみられています。仏像に着目するならば、先の縁起が記す創建年代と齟齬が生じます。

また満願寺遺跡での建物遺構からは、ある段階で建替えや既存建造物の規模拡張を含む再建がなされたことを示しており、これら伽藍配置の形成は日想觀の行儀を記す『觀無量寿經』の影響が想定されています。満願寺への浄土教の影響を考えると、以下の史料は佐原氏による造寺活動の一端を示します。

【史料1】元仁元年（1224）十月「泉涌寺不可棄法師伝」（『新横須賀市史I』748号）

同冬十月、依肥州刺史平家連之請、下向関東、経過十六駅亭、銚壳之女忘脂粉而受戒、漁獵之男拋網竿而聞法、遂到家連三浦館、供養梵字、投歩鎌倉、二品禪定比丘尼（北条政子）〈諱如実〉并武州刺史平泰時朝臣受菩薩戒、總逗留鎌倉一七日間、或授戒法、或讚仏經、道俗顚々、昼夜無間、

【史料1】によると、京都泉涌寺開山で入宋経験のある俊芻が、佐原家連の招請で「家連三浦館」に招かれ、「供養梵字」を催したという内容です。佐原氏本拠地での仏堂供養であり、かつ著名な俊芻の招請となれば、満願寺での大規模供養が想定されます。

このように満願寺に関する文献・考古・美術分野の史料を通覧してみると、同寺の創建にあたっては、ある特定の時期だけに起点や画期を求めるのではなく、段階的に形成されてきたものと捉えた方がより実態に適っているように思われます。それでは次章より、満願寺において慶派仏師が関わる時期、俊芻が招請される時期での佐原一族の文化的環境を順番に見てみましょう。

佐原氏と慶派仏師の邂逅—在京活動と源頼朝—

佐原氏が慶派仏師と関わる契機に、源頼朝による建久六年（1195）の東大寺供養のための上洛が考えられます。ここに佐原義連・景連父子が参加しています。この東大寺供養には多くの鎌倉御家人が参列し、京・南都での本場の仏教文化に触れる機会にもなりました。

た。例えば、供奉を勤めていた武藏国御家人畠山重忠は、在京期間中に梅尾山の明恵に謁談して浄土宗法門について談議し（『吾妻鏡』）、同国御家人津戸為守や上野国御家人大胡実秀も東大寺供養で上洛し法然と出会い浄土宗に帰依しています（『法然上人伝記』「津戸消息事」、「大胡実秀へつかはす御返事」）。また武藏国御家人小代行平も供養に参列し、後に奈良仏師快慶による建仁三年（1203）制作の醍醐寺不動明王像の結縁者にも名を連ねています。

後白河院との対面、東大寺供養という二度にわたる頼朝の上洛は、多くの京都文化を鎌倉に持ち帰る機会にもなりました。造像については、当時後白河院のもとで活躍する奈良仏師康慶との知己を得て、後に頼朝は永福寺造営期間中に、仏師康慶の鎌倉下向を京都に打診しています（「藤原範綱書状」『和歌真字序集（扶桑古文集）』）。以後、頼朝周辺の造像では康慶を、その他有力御家人北条氏・和田氏・足利氏の造像では弟子運慶が起用されるなど、慶派仏師との交流がうかがえます。二回目の東大寺供養のための上洛では、広く康慶・運慶・快慶らが携わって完成させた東大寺南大門の諸像など、慶派仏師の活動を有力御家人足利氏をはじめその他中小御家人たちが目にする機会となりました。そうした点を踏まると、佐原義連・景連父子が二回目の東大寺供養に供奉して慶派仏師の活動を目の当たりにし、京都社会で交流を持ち、その後本拠地の氏寺満願寺での造像依頼に結実したことも十分推測されます。

加えて佐原義連の本拠地にて慶派仏師による造像が行われた背景に、慶派仏師を多く起用した源頼朝の影響が考えられます。佐原氏と源頼朝との関係をみる際に、次の史料は大変興味深いです。

【史料2】『吾妻鏡』養和元年（1181）四月七日条

七日壬子、御家人等中、撰殊達弓箭之者所無御隔心
之輩、毎夜可候于御寝所之近辺之由定云々、江間四郎・下河辺庄司行平・結城七郎朝光・和田次郎義茂・
（北条義時）梶原源太景季・宇佐美平次実政・榛谷四郎重朝・葛西三郎清重・三浦十郎義連・千葉太郎胤正・八田太郎知重、

この史料は、養和元年（1181）に「毎夜可候于御寝所之近辺之由被定」と頼朝の寝所警固を担当するために選定された、北条義時・下河辺行平・結城朝光・和田義茂・梶原景季・宇佐美実政・榛谷重朝・葛西清重・三浦義連・千葉胤正・八田知重の十一名を記した記事です。いずれも頼朝挙兵以来の三浦義明や北条時

政・八田知家の子息、つまり二世世代の御家人で構成され、実際にも頼朝寝所を中心に身辺警護を担い（文治五年（1189）に頼朝が彗星を見るため寝所を出た際、佐原義連・結城朝光・梶原景季・八田知重が警固しています）、「皆近臣也」と記録されました（『吾妻鏡』）。昵近衆とも呼べる頼朝の近臣集団は、有力な御家人のなかより一族の惣領が健在でかつ次世代を担うべき人材たちが選出されており、血縁や乳母の関係を通じて頼朝個人と密接な関わりがあります。

先述した北条義時の父時政が建立した願成就院や、文治五年（1189）に和田義茂の兄義盛らが願主となった淨樂寺において造像を運慶が担当しており、頼朝と個人的に関係の深い御家人への文化的影響力は非常に大きかったことが窺えます。佐原義連の本拠において、1200年頃に慶派仏師の造像が行われたことも頼朝周辺での造像環境が彼の近臣である義連に影響を与えたことは容易に想像できます。義連の慶派仏師起用による造像の結果、当初は小堂であった氏寺も、次第に頼朝の文化的影響を受けつつ寺格を整えていったのでしょう。

慶派仏師による満願寺の諸像は、こうした佐原義連・景連父子の東大寺供養参列や源頼朝との個人的な関係の深さの結果、もたらされた文化受容の遺産と理解できるのではないでしょうか。

北条時房と佐原家連—都市鎌倉での政治的地位—

ただし、満願寺の形成過程を文献史料でみた場合、やはり【史料1】で示した元仁元年（1224）に招請された俊芻の来訪と仏堂建立は重要な意義を持つことに間違いありません。とくに満願寺遺跡で見られる堂舎の建替えや規模拡張の様相は俊芻招請の時期とリンクする可能性が高く、寺容整備および伽藍形成へと進んだと思われます。では、なぜ佐原氏は著名な僧侶俊芻を招請できたのでしょうか。

俊芻が三浦館に招請される以前、佐原景連という人物がしばしば幕府椀飯役や社寺への將軍参詣の随兵などを勤め、またその子息景義も同様に幕府儀礼に従事し、鎌倉周辺での活動が目立ちます。しかし承久の乱になると、景連の兄弟である家蓮が、紀伊国守護や肥前守に補任されます。さらに家連は執権北条一族との関わりが深く、安貞二年（1228）に北条時房の子息時直に嫁した娘が男子を出産しており（『吾妻鏡』）、すくなくとも同年以前から北条時房との関係が築かれていきました。翌年には時房主催の椀飯で家連が行縢・

沓役を勤め（しかも「左衛門尉」に任官しています）、以後は毎年のように参加がみられることから、急速な北条氏への接近があったとみられます。寛元三年（1243）の將軍藤原頼経の臨時出御供奉人を定めた際には、佐原氏の序列の中で家連が最上位で記載されています（『吾妻鏡』）。

以上の佐原一族での動向に鑑みると、俊芻を招請した元仁元年（1224）段階では、すでに佐原一族のなかで執権北条一族に接近した家連が有力勢力として位置付いていたと考えられます。とくに家連と俊芻を結ぶキーパーソンとして、嘉禄元年（1225）まで六波羅南方探題を勤めた北条時房が重要になってきます。時房は執権北条氏のなかで在京活動を担い、彼の拠点となった六波羅探題の地は、俊芻が開山となった泉涌寺と極めて近い地理環境にありました。加えて、時房は建保六年（1218）に、実朝の後継者問題について会見を行うため上洛した政子に同行し、承久元年（1219）の三寅（九条道家の子息、後の頼経）下向の交渉にも加わっていました。三寅が誕生する際、道家室の倫子の出産時の戒師を俊芻が勤めているなど、入宋僧俊芻と九条家との関係は彼が帰朝した早い時期から築かれており、家連が俊芻との間に接点を持ち得た背景に、九条家との繋がりのある北条時房を介した人的関係があったと考えられます。

さらに、俊芻の三浦・鎌倉下向の背後には、執権北条氏の意向も垣間見えます。俊芻は家連の三浦館で仏堂供養を行った後、その足で鎌倉へ赴き北条政子・泰時の戒師を勤め同地で半月ほどの滞在をしています。この時期、在京活動を担った時房は、幕府首脳陣の一人として執権北条義時の死後も鎌倉に戻らず探題として在京を続け、幕府の歳首椀飯儀礼では幕府内序列のトップに位置付いていました。俊芻の下向は、時房との人的関係を通じて、すでに三浦・鎌倉の地での彼の活動が予定されていたからこそ、上記の行程が組まれたものと考えられます。俊芻の鎌倉下向は、三浦家連を媒介としつつ北条時房・政子・泰時ら執権北条一族の意向によってなされた事業だったと想像されるのです。

いずれにせよ、佐原家連による俊芻招請と仏堂供養は、北条時房への接近がもたらした文化事業と考えられましょう。佐原氏が鎌倉幕府政治のなかで一定の地位を築き、都市鎌倉へもたらされる文化を、北条氏との密接な関係を通じて自身の本拠地へ導入していたことが分かるのです。

おわりに

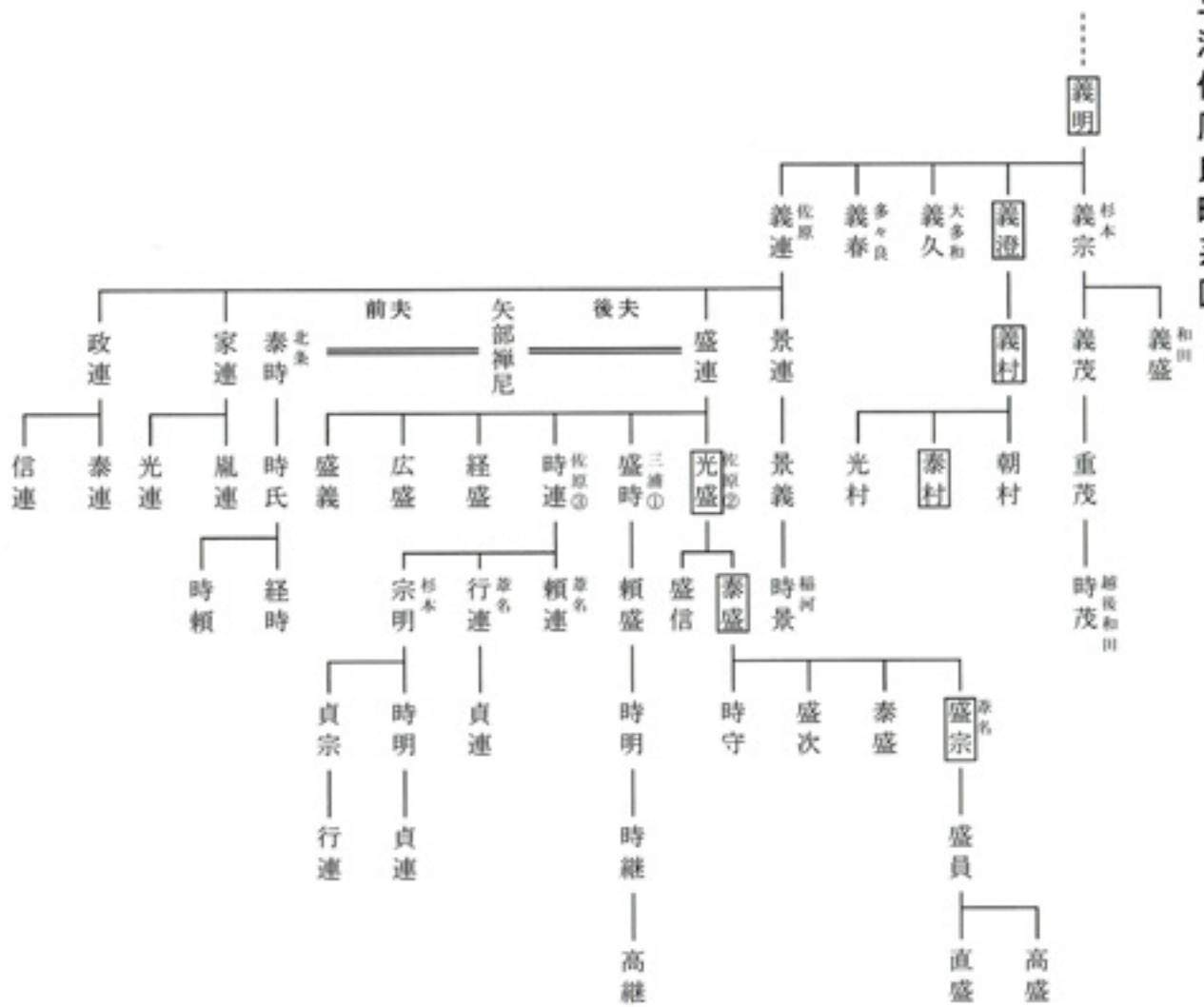
満願寺の創建および以後の伽藍形成は、「満願寺縁記」にあるような佐原義連期に創建された小堂をベースとしつつも、満願寺の造像に関しては、東大寺供養による佐原義連・景連の上洛や源頼朝との個人的な関係の深さが慶派仏師と接触する機会となって同寺に慶派仏師の作例がもたらされたこと、そして、執権北条氏（時房）との関係を強化した家連の俊芻招請によって寺容整備および伽藍形成へと段階的に行われたこと、を指摘しました。

佐原氏は、三浦惣領家とは異なる独自のネットワークを京都・鎌倉に結びながら文化活動を進め、本拠地の満願寺に慶派仏師の諸像や淨土伽藍を創り上げていったのです。とりわけ、源頼朝周辺の文化環境や北条時房・泰時・政子など幕府首脳陣が傾倒する淨土信仰の影響を佐原一族が多分に受けていることは注目されます。当該期の鎌倉御家人たちの文化と言えば京都からの影響と理解されがちですが、和田義盛発願による淨樂寺の運慶仏の存在や、三浦義村による淨蓮房源延（すでに鎌倉に滞在）を招いての三崎海上での迎講実施は、京都だけにとどまらない頼朝や鎌倉での文化交流とその影響力のほどが想像されます。鎌倉が東国における文化発信地になりつつあることをこうした事例は示しているのかもしれません。満願寺は佐原一族が頼朝周辺や鎌倉で紡いできた文化活動の成果が凝縮された場といっても過言ではないでしょう。

【参考文献】

- 岩田慎平「北条時房論—承久の乱以前を中心に—」（『古代文化』68、2016年）
鈴木かほる「鎌倉後期の三浦佐原氏の動向」（『三浦一族研究』4号、2000年）
高橋秀樹「佐原義連とその一族」（同『三浦一族の研究』吉川弘文館、2016年）
西谷功「泉涌寺開山への諸相」（同『南宋・鎌倉仏教文化史論』勉誠出版、2018年）
横須賀市『岩戸満願寺—満願寺境内遺構確認調査報告—』横須賀市教育委員会、1992年
横須賀市『新横須賀市史 別編 文化遺産』横須賀市、2009年
横須賀市『新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世』横須賀市、2012年
渡邊浩貴「三浦佐原一族の本拠と造寺活動—満願寺出土中世瓦群との関連から—」（『総合研究 岩戸満願寺遺跡の研究—三浦半島における鎌倉時代寺院の瓦—』神奈川県立歴史博物館、2023年）

三浦佐原氏略系図



【凡例】

…惣領の地位にあった者（佐原（葦名）盛宗以降は未詳）

— ...婚姻關係を示す

^① 三浦…「三浦介」を継承した盛時系佐原氏

佐原②…佐原氏惣領職を継承した光盛系佐原氏

佐原③…在京活動などを主に担った時連系佐原氏

[※]本系図は『新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世』(横須賀市史、2012年)を参照しつつ、筆者が適宜加減を行った。

【系図】 三浦佐原氏略系図